

## 論文

## 19世紀におけるウィリアム・ペティの「再発見」

— スコットランド啓蒙の黄昏とリカードイアンたち — \*

佐藤 有 史<sup>†</sup>

## 要 旨

ウィリアム・ペティの経済学が19世紀半ばに「再発見」されたことはよく知られているが、それがなぜ、どのようにして再発見されるに至ったかの詳細はまだ明らかにされたとは言えない。本論文では、アダム・スミスが『国富論』でペティにまったく触れずに終わったものの、D. ステュアートの『経済学講義』などを検討することによって、スミスのスコットランド啓蒙の後継者たちは、実はペティをスミスと並んで労働に対するある種の形而上学的観念を共有した人物として、頻繁に引用し、批判していたことを明らかにする。だが、幸運にもリカードウが『国富論』を手にし、リカードウがスミスの後継の経済学者としての地位を固めたことによって、経済学の進むべき方向が明確となった。そして、その方向に歩み始めたリカードイアンたちこそが、「経済学の歴史」という観念を初めてもち始め、その過程で、彼らによってペティの経済学は再発見されたということを本論文は主張する。

## 1. はじめに

2023年に生誕400周年記念を迎えるウィリアム・ペティに対する評価の高まりは、いや増すばかりであり、新たな視点からの諸研究の発展も尽きることがない<sup>1)</sup>。実際、次のリチャード・ストーンの評価は、ペティに対する標準的な今日の評価と言えるだろう。

\* 本稿は科研費補助金基盤研究 (B) 課題番号16H03602による研究成果の一部である。また、本稿は草稿段階で第45回リカードウ研究会 (2022年8月27日、於・立教大学) において報告された。佐藤滋正、出雲雅志両先生をはじめ、貴重なコメントをいただいた方々に御礼申し上げます。なお残る誤りは、筆者のものである。

<sup>†</sup> 立教大学経済学部教授 E-mail: ysato@rikkyo.ac.jp

1) 近年の注目すべき研究として、特に、ペティのベーコン主義的な社会学プログラムに基づく政治算術の実践的側面を強調しつつ包括的なペティ伝を提供しようとする McCormick (2009)、ならびに、今日の開発経済学の基本的な考え方の多くがイギリスの植民地主義的な目的を推進するためにペティによって明確に展開された点を追求する Goodacre (2018) を挙げておく。また、大倉 (2013) によるペティ研究の現状の紹介も見よ。

国民経済計算の創始者であるウィリアム・ペティは、知的活力、科学的好奇心、発明性にあふれた17世紀のイギリスにおける最も注目すべき産物の一人であった。(Stone 1997, 5)

ペティは経済学の創始者にして、統計学の創始者であるという評価は、19世紀半ば以来すでに指摘され始め、20世紀初めにはそうした認識が国際的に広く共有されていた<sup>2)</sup>。そして、そうした認識の共有の基盤を、ただイギリス国内ばかりか、広く国際的な共通認識にまで、結果として高めた人物はJ. R. マカロックであったことはよく知られている。すなわち、マカロックがペティを紹介した『経済学文献』(McCulloch [1845] 1964)を出版するや否や、その記述は直ちに、例えばW. G. F. ロッシャー (Roscher [1851] 2009) や、カール・マルクス ([1859] 1970) らによって、彼らの経済学史的叙述の典拠・出発点として使用され、さらにその認識が急速に国際的に波及していく様が看取できるのである<sup>3)</sup>。

だがここで、当然の疑問が出来る。マカロックはどのようにしてペティを知ったのか。そもそも、マカロック以前にはペティはどのように扱われていたのか。

アダム・スミスが『国富論』でペティに一度も触れなかった事実はよく知られている(馬場 2008, 265-66)。この事実は、スミスが『国富論』で二度「政治算術」という用語に言及しているだけに(WN I. viii. 30/ 訳①131; IV. b. 30/ 訳②250)<sup>4)</sup>、奇妙である。だからといって、もちろん他にスミスが言及することのなかったジョウゼフ・ハリスやサー・ジェームズ・ステュアートらと同様、ペティの経済学<sup>5)</sup>がスミスの死後に言及されることがなかった、などということとはなかった。スミス死後の19世紀初頭において、彼らはスミスの言及の有無にかかわらず、引用され、論評されていた。それゆえ、マカロックによる「再発見」の意味は、ただ単に見失われた対象の再発見ということではまったくなかった。

本稿で私は、19世紀におけるペティの「再発見」の経済学史上の意義を明確にしようと思う。それは偶然の再発見ではなかった。むしろ、19世紀初頭に、ある意味において危機的状況にあったスミス後の経済学の方向性が、リカードウによって再構築されて整えられ、新たな方向へと進む過程の中で生まれた必然的な出来事であったと言えるのである。

2) 「ペティは、産業社会に対する一般的な態度において、アダム・スミスの先駆者であり、『経済学の創始者』であるという考え方が、多かれ少なかれ広まっている」(Hull 1900, 339)。

3) マルクスはマカロックを引用しつつこう記した。「1711年11月26日の『スペクテーター』誌は、この『素晴らしいサー・ウィリアム・ペティの例証』を引用している。だから、『スペクテーター』誌はペティと40歳ほど若い一著述家とを混同していたというマカロックの推論は誤りである [McCulloch [1845] 1964, 102]。ペティは自らを新しい科学の創始者と見なしている。……」(Marx [1859] 1970, 52 fn./ 訳59)。ロッシャーについては、Hull (1900, 439-40) を見よ。

4) 『国富論』(Smith [1776] 1976) からの引用は、グラスゴウ版で採用されている編・章・節・項・パラグラフの表示による。

5) ペティの「政治算術」がその後、統計学等にどのように継承・発展させられていったかという点については、すでにHull (1900) によって十分に解明されている。

本稿の内容は次の通りである。第2節では、スミスの死後にスコットランド啓蒙内部で経済学の方向性が探られていた、名高いデュガルド・ステュアートによる経済学講義の功罪について論じられる。その過程で、ステュアートの経済学的知識が、ローダーデールとの共軌関係の中で展開されたという事実、そしてもちろんベティについての彼らの認識と言及もまさに彼らの間で共有されていた事実が論じられる。第3節では、そうした19世紀初頭におけるベティの取扱いは、まったくの外部者トマス・ド・クインシーによって一変させられたことを確認する。第4節では、マカロックがド・クインシーの影響を受けて、自らのベティ認識をどのように変化させていったのかが、彼の多くの主要な出版物の記述の変遷を詳細にたどりながら確認される。そして最後に、結論的所見が述べられる。

## 2. スコットランド啓蒙の黄昏と経済学の危機

### 2.1 ステュアート経済学講義

18世紀末のイギリスには、『国富論』が示した経済学という新しい学問の全貌、解決すべき諸問題の所在に、スミス亡き後どのように向き合い対処すべきなのかという大きな課題が残されたのだが、そうした状況の中で、スミスの知的「遺産相続人」としてひとまず名乗りを上げたのが世紀転換期に転機を迎えつつあったスコットランド啓蒙に属する人々であったのは理解できる。とりわけ、やや専門外であったが、スミスを直接に知る者としてドゥガルド・ステュアートがそうした役割を担うことになったことについても理解は可能である。だが、彼が実際になした経済学講義の内容の功罪については、冷静かつ客観的な評価が求められよう。

ステュアートの講義は、1800年の冬に初めて開講された (Veitch 1858, xlviiii)。スミス亡き後の空隙を埋める役割を期待された彼の講義について、ステュアート死後30年経った1858年<sup>6)</sup>にもなってヴィーチが記した以下の回想は、今日においてよく見られるステュアート講義の評価の仕方の一つの原型をなしていよう。

彼 [ステュアート] が別個の経済学講座を開講した当時、この学問は、この国の一般の人々の心の中で、ほとんど形を成さず、明確でもなかった。国民の教養ある人々でさえ、その適切な領域や、そのテーマについての科学的議論の重要性について、十分な理解を示してはいなかったのである。アダム・スミスの学説は、当時のより思慮深い先進的な人々の間では実を結んだが、政治家にも国民にもほとんど浸透していなかった。……彼の経済学講義は、当時、イギリスの若者にとってアクセス可能な唯一の講義だったのであり<sup>7)</sup>、また、そのよ

6) すでにマカロックが晩年に差し掛かるころである。

7) 1816年に、ジョージ・プライムはケンブリッジ大学で経済学講義を開講するにあたって、次のように記した。「カレッジを去る前に、私は経済学の講義を行なうことを考え、この目的に関して読

うな状況下で、この学問の教義を一般に普及させるうえで当時見出すことのできた、ほぼ唯一の、そして間違いなく最も印象的な手段であったのである。(Veitch 1858, li)

講義についての最近の以下のような称揚は、そうしたヴィーチの評価の残響の大きさを示している。

ステュアートの教えは、フランシス・ホーナー、ヘンリー・ブルーム、ローダーデール卿、ジェームズ・マッキントッシュ、ジェームズ・ミルら、後に経済学の分野で活躍する多くの若者を含む聴衆に大きな衝撃を与えた<sup>8)</sup>。しかし、経済学とその方法に関するステュアートの見解は、この輪をはるかに超えたものであった。特に『エディンバラ・レビュー』誌に寄稿した弟子たちによって普及し、彼の講義を受けたことのない経済学者たちにも大きな影響を与えた。例えば、リカードウやジョージ・プライムがそうした例であった。この点で、ステュアートは新しい世代の経済学者に道を開いたと言えるかもしれない。(Depoortère and Ruellou 2016, 537)

だが、そうしたステュアートの経済学講義の評価は、その後彼の教室から巣立った人々から連想してそうであったに違いないという、一種の後知恵的な論点先取に過ぎないように思われる。なるほど博識ではあるが、しかし深みに欠けるステュアートの講義録は、彼にお得意の「知識に対する真の貢献というよりは、博識と修辭的技量の誇示」(Fontana 1985, 82)と紙一重であった。それどころか、その理論的内容を仔細に検討してみると、『国富論』で明らかにされた経済学という学問の全貌と、それが未だ解決を待つ諸問題の所在とを危険なまでに無視し、歪め、スミス批判を旨とした見当違いの方向へと導く恐れのあるものだった。実際、ステュアートの死後にサー・ウィリアム・ハミルトンによって編集された『講義』全2巻のうち第1巻が理論編に相当するのだが、同巻で曲がりなりにも『国富論』第1編・第2編中に含まれるス

---

書が続いていた。それというのも、その後、イギリスの立法や他国との条約に大きな影響を与えたこの科学を、教養教育の一環とすることの重要性を深く感じていたからである。これまでイギリスのどの大学でも、この学問に関する講義は行なわれていなかった。しかし、エディンバラの道徳哲学教授であるデュガルド・ステュアートは、1806年から2、3年の間、自身の講義にこの学問に関する補足的な講義を追加し、[ウィリアム・]スミス教授は近代史の講義の中でこの学問に関するいくつかの点を説明していた」(Bayne 1870, 120)。

8) Veitch (1858, liv-lv fn.) に受講者名簿中の主な名前が記載されている。その名簿には、さらに、シドニー・スミス、フランシス・ジェフリー、ウェップ・シーモア卿、ヘンリー・コウバーン、マクヴェイ・ネイピア、アーチボルド・アリソン、第3代パーマストン子爵などが含まれていた。「経済学のクラスは、単にカレッジの課程を修了した学生だけからではなく、熟年層の聴衆、特に弁護士たちからもなっていたし、後者の人々が中心ですらあったということが注意されなくてはならない」(ibid.)。なお、その名簿にないジェームズ・ミルの出席問題については後に触れる。

ミスの経済理論の検討に直接あてられている部分は50ページに満たないように思われる。とりわけ、スミスの「実質価格と名目価格」の区別の検討にあてられたたった22ページ（Stewart [1855-56] 1968, I: 349-71）以外、ステュアートはスミスの理論を真剣に検討しているように思われない<sup>9)</sup>。その他の領域のスミスの検討のほとんどは、重農学派とスミスの生産的労働論（時に統治論を含む）の対比、さらに種々の経済学（ときに貨幣）の歴史的な性格などにあてられていたのである。いやむしろ、そうした構成には、次のようなある有害な意図があったと疑わせるのに十分である。

ステュアートが経済的自由主義の普及を優先させたのとは対照的に、価値論の考察は極めて後景に追いやられていたのである。スミスの経済学についての彼の説明のこうした特徴はきわめて顕著なので、リカード以前に、スミスの残した未解決の状態にもかかわらず、価値論を発展させようという持続的な試みが一つもなかったのは、その意義を低下させるというステュアートの決定によって説明できるとさえ言えるかもしれない。（Milgate and Stimson 2009, 101. 強調は佐藤）

それでは具体的に、『講義』におけるごくわずかなミス価値論の検討部分を考察してみよう。ステュアートの検討は、その大部分が『国富論』第1編第5章で展開された実質価格・名目価格論、価値尺度論に集中し、自然価格論<sup>10)</sup>についてはほとんど検討されていないのが顕著な特徴である。ステュアートによれば、スミスの実質価格・名目価格論は、労働についての「形而上学的論拠」に基づく区別である（Stewart [1855-56] 1968, 349, 354, 357, 364）。ミスは、等量の労働は労働者にとっては等しい価値をもつというが、スミスのいう労働とは何か測定に使用できる尺度ではなくて「抽象的な観念」に過ぎない（ibid., p. 352）。そうした労働概念に基づいて、諸商品の実質価格を論ずる以前に、そもそも労働こそは「本源的購買貨幣」と言ったり、「富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである」（WN Lv. 2 / 訳①53）などと主張するのが誤りである。

9) ミルゲート＝スティムソンは、Stewart ([1811] 1976) について以下のように論評するが、このことは、ステュアートの『経済学講義』にもそのままあてはまる。「ステュアートの『アダム・スミスの生涯と著作』について最初に記録しておくべきことは、『国富論』の第1巻と第2巻に含まれるスミスの純粋に理論的な経済学への貢献が、いかに少ないか、ということである。実際、ステュアートのエッセイの95ページのうち、『国富論』そのものを論じたものはわずか18ページであり、価値、分配、成長、技術革新の理論に対するスミスの貢献の分析的な核心を扱ったものは、ほとんどない」（Milgate and Stimson 2009, 100）。

10) 自然価格論については、驚くべきことに、『国富論』からのそのままの引用によって、ほぼ説明を——しかも非常にわずかな紙幅で——すませている（Stewart [1855-56] 1968, I: 390-91; II: 5-9）。

この問題に関するスミス氏の学説は、明らかに資本の蓄積に先立つ社会の状態によって示唆されている。当時、ある人の労働は他の人の労働と普遍的に交換されており、商品の交換価値は、その労働の量に応じて評価されていた。この状態と、労働者が自分の労働を、同胞の労働に対してだけでなく、資本の利潤や土地の地代から生じる価値とも交換しなければならず、価格の三つの構成部分すべてを含む商品が絶えず互いに交換されている、われわれのような社会の状況との間には、どれほど大きな違いがあることだろうか。なるほど、労働者が払う犠牲は常に同じであるに違いない。そして、彼は、自分の努力の程度に応じて、安いとか高いとかといった形容語句を与えるように自然に導かれるであろう。だが、このことが、異なる時代や異なる国における異なる価値を比較するための標準や一定の価値をどのようにしてもたすというのだろうか。(Stewart [1855-56] 1968, I: 456; cf. *ibid.*, pp. 353-54)

これらの文章が主張するのは、「商品価格 (= 賃金 + 利潤 + 地代) > 賃金」という、そもそもスミスがすでに文明社会において成立すると指摘していた現象が、スミスの実質価格論と矛盾するということである。

ところがステュアートは、この問題を掘り下げることなく、『講義』がさらに進むにつれて、ジョン・ロック、ライス・ヴォーン、ジョウゼフ・ハリスを引用しながら、価値尺度はその平均価格が安定的でなければならないとして、労働者が食糧に対して非弾力的な需要を有すること、その一人ひとりの食糧消費量はほぼ標準に近いことから、食糧の平均価格は安定的だとし、そうしたものに必ず一定の消費支出がなされる労働者の賃金を価値尺度とすることを提言する。

ゆえに、労働の賃金によって価格を測るというルールのもとの原理が生じるのだと私は理解する。というのも、労働の賃金は穀物の貨幣価格によって年ごとに変動するのではなく、一般にその平均価格によって調節されるからである。したがって、私が価値の尺度として労働の賃金に訴えるのは、抽象的に考えられた労働に関する形而上学的な理論の結果ではない。私は単に、労働の賃金を、それが正確に把握され付随する諸事情に適切な斟酌がなされている場合には、特定の期間における、穀物や生活必需品の平均的な価格を証明するものと見なしているだけなのだ。スミス氏の推論は、お分かりになるだろうが、この順序を逆転させ、労働の一定かつ不変の価値に関する形而上学的思弁から、穀物の貨幣価格に基づいたルールを演繹しているのである。(Stewart [1855-56] 1968, I: 364)

結局、ステュアートが長々と価値について論じた結論は、デフレーターとして賃金を用いることの妥当性(支配労働観念の一変型)の主張と、スミスにおける労働の形而上学的性格の強調とに尽き、相対価格の決定問題は一顧だにされなかった。

## 2.2 ローダーデールによるペティ＝スミス批判

ところで、上に見たステュアートの『経済学講義』は、さまざまな諸文献からの引用によって彩られていた。実際、「スミス前後の英語とフランス語の文献でステュアートが使いこなした文献の知識には目を張るものがある」(Winch 1983, 50/訳44)と見なされることも多い。だが実は、こうしたステュアートによるさまざまな文献引用は、ローダーデールとの共同作業であったことは強調されねばならない<sup>11)</sup>。ローダーデールはステュアートの講義を受講していただけではなく、ステュアートの友人でもあった(Macintyre 2003, 140-41)。それゆえ両者は、文献資料の情報のやり取りばかりか、経済思想について意見のやり取りをしていたはずであって、ステュアートの『経済学講義』とローダーデールの『公富論』(Lauderdale [1804] 1966)とは、それらで語られている内容、およびそれらで言及されている文献資料の双方ともに、ある種の共軛関係にあるものと見なされなくてはならない。

『公富論』をもって最初期の体系的『国富論』批判と見なす向きもあるが、しかし、その第1章「価値について」の主張は、実は上に見たステュアートのスミス価値尺度論批判と相補的であることが容易に看取できるし、そう見るべき理由がある。そして、ステュアートで引用されていたJ. ハリスに加えて、ステュアートの『講義』では言及されなかった『租税貢納論』(Petty [1662] 1899)が参照され、ペティ・ハリス・スミスの組み合わせで、批判対象とされているのである。ローダーデールは述べる。

[諸商品の価値を安んじて測定できる不変の尺度があると信じ、] こうした賢者の石を求めて、多くの人々が探してきたのであって、その知識と才能に関して傑出した人の中には、労働のうちに、真の価値尺度を構成するものを発見したと思ひ込んだ人も少なくない。サー・ウィリアム・ペティは、次の一節を書いたとき、そうした空想に完全に取り憑かれていたようである<sup>12)</sup>。「仮にある人が、自分で手を下して、一定面積の土地に穀物を栽培することができるとしよう。すなわち、この土地の耕作が必要としているだけ、掘り、または鋤き返し、まぐわをかけ、除草し、刈り入れ、家に取り入れ、脱穀し、そしてふるい分けすることができるとしよう。しかもなおその上に、この土地に播けるだけの種子を持っていたとしよう。私は言う、この人が自分の収穫物の所収から、自分の種子を差し引き、まだ同様に自身の食べ

11) このことについては、ステュアート自身、『経済学講義』においてジェイコブ・ヴァンダーリントならびにジョン・アズギルのパンフレットの内容を紹介する際に、ローダーデールによる情報提供であったことを伝え (Stewart [1855-56] 1968, I:300-01)、同じ内容のものが『スミスの生涯と著作』でも記された (Stewart [1811] 1976, 343 n./訳188-89注 (a))。

12) ローダーデールはここに次の注を付している。「Treatise of Taxes and Constitutions [sic], p. 23. 4 to edit. 1667. [Petty [1662] 1899, 43/訳76-77]」。書名の誤記は第2版でも修正されることはなかった (Lauderdale 1819, 21)。このことは、ローダーデールは『租税貢納論』を手元におきながら著したのではなく、抜粋録のようなものを筆写していた可能性を示唆する。

たもの、および衣類その他の自然的必需品と交換に他人に与えたものを差し引いたとき、なおそこに残る穀物は、その年の間におけるその土地の自然的かつ真の地代である。そしてこのような7年間の中数、否むしろ凶作と豊作とが回転して周期をつくり上げている幾年かの中数が、穀物で表わされたその土地の通常の地代である、と。

しかし一歩を進めて、副次的な問題ではあろうが、この穀物すなわち地代がイングランドの貨幣でどれほどに値するかという問題がある。私は答える、それは、別の一人の人が、同じ期間中、仮に貨幣の生産、製造に専心従事したとして、自分の費用のほかに貯蓄しえただけの貨幣である、と。すなわち、別の人が、銀の生産される地方に赴き、そこでそれを発掘し、それを精錬し、それを他の人が穀物を栽培しているところに持ってくるでしょう、そして同じ人がそれを貨幣に鋳造する等々のことをし、さらにこの人は、銀のために働いている間に、生計に必要な食物も集め、衣服も手に入れる等々をしましょう。私は言う、一人の人の銀は他の人の穀物と同一価値に評価されねばならない。(Lauderdale [1804] 1966, 23-25)

このように、ローダーデールはペティからかなり長文の引用をし、次にハリス、そしてスミスの引用を続け、批判する。

同じ考えがハリス氏によって、その巧みに書かれた『貨幣・鋳貨論』において述べられている。「土地と労働の価値は、いわばそれら自身で、互いにその大きさを決定しあい、あるいは調整しあう。しかもあらゆる物ないし商品はこれら両者の生産物なのだから、いちいちの商品の価値はおのずからこれらの両者によって定められる。しかしたいていの生産の場合には労働は最大の貢献を果たすのだから、労働の価値はあらゆる商品の価値を規制する主要な標準だと見なすべきであり、しかも土地の価値は労働自体の価値の中にすでに算入されているとも言えるのだから、なおさらそうなのである」<sup>13)</sup>。

しかし、『国富論』の著者は、労働が価値の正確な尺度として考えられるという意見を確立するために最も努力した人物である。…… (Lauderdale [1804] 1966, 25-26)

私の知る限り、リカードと同様に、ペティには労働を不変の価値尺度と見なすべきだと論じている箇所はない。さらに驚くべきことに、ローダーデールは、ペティはスミスに価格の3つの構成部分という考え方を伝えた先行者として言及するのだ。ローダーデールによると、『国富論』には、国富の源泉について確定した概念がなく、スミスは、箇所が違えば違う源泉を持ち出すという一貫性を欠いた記述をしている。すなわちそれらは、異なる箇所において、「国民の年々の労働」だったり、「土地」だったり、「土地と労働」だったり、「土地と資本」だっ

---

13) Harris ([1757-58] 1995, 352/訳9)。ステュアート『経済学講義』は、この同じ箇所をスミス価値尺度論の検討部分で引用した (Stewart [1855-56] 1968, I: 365)。

たりする (Lauderdale [1804] 1966, 116-19)。

最後に、われわれは土地、労働ならびに資本を富の三つの源泉と見なすように教えられる。というのは、われわれは次のように教えられるからである。「人は誰でも、自分自身のもっている元本から収入を引き出す場合には、それを自分の労働からか、自分の資本からか、自分の土地からか、このどれかから引き出さねばならない。労働から引き出される収入は、賃金と呼ばれる。資本から……引き出される収入は、利潤と呼ばれる。……土地から生ずる収入は地代と呼ばれる……」<sup>14)</sup>。この意見は、サー・ウィリアム・ペティによって示唆されたように思われる<sup>15)</sup>。彼はそのとき、イングランドの富の阻害要因として、租税が土地、資本、労働に課されるのではなく、主に土地のみに課されていことにありと述べていたのである。しかし、この独創的な著述家は、一般に、土地と労働が富の唯一の源泉であると見なしている<sup>16)</sup>。(Lauderdale [1804] 1966, 119)

以上のようなものが、19世紀初頭におけるペティの引用のされ方であった。本稿で確認したように、単に『政治算術』のみならず、『租税貢納論』のペティも引用されていた。しかも、ローダーデールの『公富論』は、リカードウによって『経済学および課税の原理』の二つの章の中で批判的検討が加えられていたのである。だから、リカードウおよびリカーディアンたちは、同書の当該箇所を十分に読んでいたはずである。だが、リカードウとその周囲の人々で、ペティに言及した人は誰もいなかった。ペティは、ローダーデールによるスミス批判の装飾であり、修辭的言辭の一部でしかないと思なされたのであろう。

世紀転換期のスコットランド啓蒙において、スミス亡き後の経済学をめぐる状況は、不思議なことに、スミスのプロジェクトの推進ではなくて、スミス批判や重農主義への方向の傾斜<sup>17)</sup>、

14) 原注：Wealth of Nations, vol. I, p. 63. 4 to edit. [WN I. vi. 18/ 訳89-90.]

15) 原注：Tracts, Edit. 1768, p. 268. [Petty [1690] 1899, 301/ 訳124-25. なお、こうしたローダーデールの記述は、『国富論』の価格の構成部分論の発展についてステュアートが『講義』で述べた、次の謎のような一節について、少なくともペティのどの部分を念頭においてステュアートが述べていたのかを明らかにする。「現在私が持っているスミス氏の原稿を見ると、上記の分析あるいは分割〔価格の三つの構成部分への分割〕は、ダニキエのオズワルド氏から提案されたものようである。まさにそれと同じ分割がサー・ウィリアム・ペティによって示唆されているのは多少注目すべきことである。というのは、彼は、税が土地や資本や労働にではなくて土地だけに課されるのは国家の繁栄に対する妨げであると述べているからである」(Stewart [1855-56] 1968, II: 6) 。

16) 原注：「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素である」。Treatise on Taxes and Contributions, 1667, 40 edit. P.47. [ここでは正しい書名が記されている。Petty [1662] 1899, 68/ 訳119.]

17) さらにある意味で不幸だったのは、ステュアートが1798年初版および1803年第2版のマルサス『人口論』の最も早期の支持者の一人であったことであり (Stewart [1855-56] 1968, I: 64, 203), 初期マルサスの重農学派への過度の傾斜に伴うスミス批判をそのままなぞっていたことである (e. g. *ibid.*,

さらにはローダーデールによる自壊を招きかねないスミスへの攻撃が加えられるといったものだった<sup>18)</sup>。地金論争がリカードウの登場を見て、最高潮を迎えようとしていたまさに1810年に、ステュアートの講義は閉講を迎えたのであり、そうした意味で、それは、いまやスミスが開始したプロジェクトを正当に受け継ぐ資格のある舞台が、スコットランドからイングランドへと移行していく象徴とも言える瞬間だったのである。

### 3. ド・クインシーによるペティの「再発見」

1817年にリカードウは『経済学および課税の原理』を出版し、経済理論の記述は相対価値論から開始されねばならないことを改めて世に認識させた。分業社会は必要なものを求めて自ら生産した剰余を交換し合うしかない社会である以上、それらの交換比率（相対価値）を決定するルールを解明することこそが、まず最初に経済学に課された任務であるからだ。アダム・スミスがそうした任務を自ら設定しておきながら（WN I. iv. 12-18/ 訳①49-51）、解明できないままに死を迎え、その後経済学が方向性を失って危機的状況に陥っていたさなか、リカードウはこの任務に着手し、経済学を再構築することに成功したという評価を獲得し始めていた。リカードウによるこうした功績を熱烈に称賛し、例えばジェームズ・ミルやマカロックとは違った形でリカードウに心酔した人物が、ド・クインシーであった。

ド・クインシー<sup>19)</sup>は、リカードウの死に接して、かつて自らの『阿片常用者の夢』（De Quincey 1985）を連載した『ロンドン・マガジン』に、「経済学という学問に対するリカードウ氏の功績」とする一文を寄せ、こう書いた。

---

p.282-83)。初期マルサスの重農主義とそれにかかわる研究文献については佐藤（2005, 252-53）を見よ。

18) だが、ステュアートは、ローダーデールの著作を称賛した。「この経済学的知識の非常に難しい部門において、ローダーデール伯によってちょうど出版された著作 [[1804] 1966] は、著者の優れた能力と幅広い情報から、その論じる問題に多くの新しく重要な光を投げかけずにはいられない。私には、まだそれを完全に吟味するだけの時間のゆとりがないが、しかし、現在、ごく一般的に初歩的な真理として受け止められているこれらの教義のいくつかは、まだ受けていない新しい、より正確な分析を必要としているということに納得するのに十分な量は読んだ。特に、スミス氏と重農学派の両方のシステムに対して彼が行なったさまざまな批判（特に、公共の富を増大させる手段とその増大を規制する原因について扱った章における批判）は、これらの権威のいずれかに専従する傾向があるすべての人々の真剣な検討に値するし、同様に興味深い難解な主題に対する非常に独創的な考え方を切り開くものでもある」（Stewart [1855-56] 1968, II: 459）。

19) ド・クインシーの経済学についての研究は、文学系の研究者によるものを除くと、経済学系のものはいらない。管見の限りでも最もよくまとまったものは Henderson (1995), Ch.5. 'Thomas de Quincey reads David Ricardo', pp. 91-111 のようである。また、ド・クインシーの「法学生との対話」がペティを引用したことを指摘した唯一の研究は、Goenewegen (1982, 53) であるように思われる。

私たちの時代に起きた公的な出来事の中で、リカードウ氏の死ほど私の心を揺さぶったものは記憶にない。私にとってはある意味では個人的な苦悩であった——そして、彼の並外れた才能を知り、尊敬していた他のすべての人々にとっても、間違いなくそうであった。というのは、偉大な知的功績は、それが着実に熟考された場合には必ず、何らかの個人的尊敬を得ざるをえないからである。……自分自身を責める機会を失ったことへの最大の慰めとして——そして、リカードウ氏の記憶に敬意を表するための最善の手段として——私はいま、彼が経済学において果たしてきたものについての知識を広める努力をしたいと思う。(De Quincey 1824a, 308, 310/ [1897] 1970, 37-8, 42)<sup>20)</sup>

こうして、予備的対話と6つの対話編からなる「三人の法学生の対話」が『ロンドン・マガジン』に4回にわたって分載された (De Quincey 1824b)。その内容は、三人の法学生の対話形式を通じてのリカードウ価値論をめぐる問答であり、2商品の相対関係により形成される相対価値論を考察する場合の、(スミスの不変の労働尺度のような)不変の尺度を前提とするやり方と、生産費(価値の原因)から考察するやり方とを明確に区別しつつ、リカードウの価値論の功績を擁護しようとする論考である。叙述の仕方は、ド・クインシーらしくややややややややややややや顔をみせるところがあるものの、明晰な論旨からなっており、いくつかの目に見える影響を与えた。例えば、この一連の論文はサミュエル・ベイリーに深く影響を与え、彼に『価値についての批判的論説』(Bailey [1825] 1967)を執筆する動機を与えた<sup>21)</sup>。そして、この一連の論文について、マカロックは『経済学文献』で次のような評価を与えた。

この対話は、1824年4月と5月の『ロンドン・マガジン』に掲載されたもので、これまで個別に出版されたことはない。ド・クインシー氏によって書かれたもので、簡潔さ、辛辣さ、

20) 引用にあたっては、『ロンドン・マガジン』のページ数とともに入手しやすいマッソン編『著作集Ⅹ』の復刻版 (De Quincey [1897] 1970) のページ数を併記する。

21) 「リカードウ氏の学説を採用したこの『対話』の著者は、何ものにも邪魔されない論理的演繹の率直さ、豊富な例証と精巧さ、テーマのさまざまな部分を提示する器用さ、そしてこの種の主題であっても抗しがたいユーモアで、大胆にその合理的帰結へと導いている。このような性格の作品は、前提から結論まで果敢に突き進み、到達したいかなる結果にもひるむことなく、主張する原理の真偽を明らかにする一種の決裁の実験であり、その正しさを検証する者がまさに望む種類の説明であることは明らかであろう。実際、『対話』の著者がリカードウ氏の諸原理を明快かつ有能で妥協のない方法で説明し、さらに彼はその諸原理を驚くべき、(筆者がこう言うのは許されるに違いない) 途方もない結果にまで導いたことから、本論考を最初に思いつかせたのである」(Bailey [1825] 1967, xxiv-xxv/ 訳25)。Cf. Rauner 1961, 9-13, 132-35. ちなみに、わが国ではベイリーの手になると訳者たちによって紹介されてきたマルサス『価値尺度論』中の「労働の不変の価値とその諸結果を例証する表」の訂正 (Bailey [1825] 1967, 151/ 訳138-39; Malthus [1823] 1986, 199/ 訳40-41) は、実はベイリーがド・クインシー (De Quincey 1824b, 562/ [1897] 1970, 101) の行なった訂正を転写したものに過ぎない。

力強さにおいて、おそらく他に比類がない。この論文は、リカードウの価値論を強く浮き彫りにするだけでなく、それに対して、マルサスによって上で言及したパンフレット [『価値尺度論』] や彼の『経済学原理』の中で、そしてセー氏やその他の人々によって、唱えられた諸々の異論を見事に退け、むしろ消滅させるものである。対話は、実に、このテーマを使い尽くしたと言えるかもしれない。(McCulloch [1845] 1964, 33)

さて、この一連の「対話」を執筆するに至るまで、ド・クインシーは、本来、イギリスになど存在するはずのなかった (cf. De Quincey 1985, 65/ 訳145) リカードウの先駆者をついに発見していたのだが、そのときの驚愕を以下のように表現したのである。やや長くなるが、本稿にとって極めて重要な箇所となるから、省略せずに引用したい。

マルサス氏は、アダム・スミスがこの問題について十分に説明していないと表現しています。マルサス氏は、「彼が価値の原理として、生産労働の量を採用しているのか、その価値 [賃金] を採用しているのか、それを明確にしていない」と述べました。しかし、これは非常に誤った表現です。『国富論』の中には、アダム・スミスが1つの同じ法則のための単なる表現の変形として両方の法則を採用していることが冗長に明らかにされていない章はありません。そうであるならば、彼が常に混同し、同一のものと見なしていた2つのものの中で、彼はいったいどのようにして選択を行なうことができたのでしょうか。実を言えば、アダム・スミスの注意がその問題に向けられることは一度もありませんでした。彼は何の区別にも感づかなかつたのです。彼の時代、あるいはそれ以前の人には誰も感づいていませんでした。フランス人やイタリア人の経済学の作家たちも、誰一人として感づいたことがなかつたのです。それどころか、今日この瞬間に至るまで、誰一人としてそれに感づいていないのです。リカードウ氏よりも先に、労働の量が価値の真の根拠であると主張した著者はただ一人、大変奇妙なことですが、経済学が最も未開な状態にあった時期、すなわちチャールズ 2世の治世の初期に、存在しました。この著者とはサー・ウィリアム・ペティであり、もし彼が彼の時代によって適切に支持を得ていたならば、この科学を大幅に進歩させたはずの人でした。彼は、引用するには長すぎるほどの注目すべき一節で、価値の法則をリカードウ的な正確さで表現しています。しかし、彼ですら、自分自身の正確さに気づいていたとは考えられないのです。なぜなら、彼は、2つの物品が互いに交換される理由は (ヨーロッパの穀物がペルーの銀と交換されると仮定して) 同じ量の労働がそれらの生産に投下されたからであると主張しているにもかかわらず、また彼は確かに、通常の他律性 (あなたが私に学のある言葉を許してくれるなら) によって、すなわち、この労働の価値に由来する他の反対の法則の導入によって、この原理の純粹さを無効にすることはしなかつたのです。それでも、こうして慎む際に、彼は、一方の法則を他方の法則と区別するという意識的な目的というのではなくて、

たまたまそうするように導かれた可能性が高いのです。なぜなら、仮にそれが彼の目的だったとしたら、彼は、そうした誤った法則を肯定するのを慎むことに満足することはほとんどなくて、正式に否定するだろうからです。というのも、A の価値はそれを生産する労働の量によって決まると言っても、その命題によって、それを生産する労働の価値によって決まらないことを意味しない限り、真実に一步も近づかないことを、研究者の心に十分に印象づけることはできないからです。(‘Dialogue the First’, De Quincey 1824b, 353/ [1897] 1970, 65-66. 強調は原文)

この一節が、まさにマカロックにベティの存在を教えた、いわば歴史的一文と言えるだろう。また、文中に「ヨーロッパの穀物がペルーの銀と交換されると仮定して」とあるが、これは、後に繰り返し種々の論者たちによって引用されることになる『租税貢納論』の一節を指している。ただ、ド・クインシーがいつ、どのようにしてベティを知りえたのか、残念ながらいまのところ私の調査では明らかになっていない。

#### 4. マカロックによる経済学史の素描

##### 4.1 リカードウ記念講義と講義録

1823年にリカードウが早逝した後、彼の友人たちによって、彼の業績と政治活動を記念して、経済学に関する公開講座のシリーズを開催する委員会が設立された。種々交渉があり、10年間の経済学に関するリカードウ講師職のための基金が調達され、マカロックが講師に選出された (Bain [1882] 1967, 214)。最終的に1824年3月29日付『モーニング・クロニクル』紙に記念講義の広告が出された (O'Brien 1970, 49)。記念講義は大成功をおさめ、1825年にも開講され、これもまた大成功を収めた。1827年にマカロックが新しく創設されたロンドン大学の経済学講座の教授職に選出されると、講義は打ち切られた (ibid., pp. 61-68)。

マカロックは1820年からエディンバラ、次いでロンドンにおいて公開講座、また個人教室の双方の形で経済学教育に従事していた。そうした中で出版されたのが、『経済学講義』であった。同書の序文にあるように、「この講義録を出版する目的は、経済学を学ぶ人々に、この学問の基礎となる原理、そのさまざまな結果を説明するために提唱されてきた最も有名な理論の特徴、政治学との区別、社会のあらゆる階層や秩序に対するこの学問の有用性、そして私が公開授業と個人授業の両方でこの学問を教える際に守っている計画についての一般見解を提供することであった。……この講義録は私の授業に参加する人たちのために書かれたものであるが、私はこの本が他の人々にも役立つことを願っている」(McCulloch [1824] 1995, i)<sup>22)</sup>。

22) ここで確認しておくべきは、エディンバラ大学出身のマカロックがデュガルド・ステュアートの経済学講義に出ていたかどうかである。なるほど、マカロックはこの『経済学講義』でステュアートの

この『講義録』の内容は、1824年の年度においてのみ、リカードウ記念講義の経済学史の入門的講義に反映されたようである。この開講初年度においてマカロックが示しえたペティの認識は次のものにとどまっていた。

ジョサイア・チャイルドは、その著作が重商主義の諸原理に基づいているとはいえ、健全で自由な見解を多く含んでいる。ウィリアム・ペティとダドリー・ノースは、17世紀の経済学者の中で最も優れた人物である。後者は、当時の既成の偏見の上に立っただけでなく、新たに流行し始めた、より洗練された、より目立たない誤りを見抜くだけの賢さを持っていた。(McCulloch [1824] 1995, 37)

そして、ペティの著作として挙げたのは、『貨幣小論』(Petty [1682] 1899)、『アイルランドの政治的解剖』(Petty [1691] 1899)のみであった。

#### 4.2 ド・クインシーの影響

マカロックは1825年、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』に寄稿していた「経済学」の項目に、前年に出版した『講義録』の大部分を序論としたうえで、自らの『経済学原理』を出版した。

ところで、組版がすんだところで、おそらくマカロックはド・クインシーの『ロンドン・マガジン』上の「法学生の対話」に気づいたのであろう、ちょうど1825年のベイリーの『批判的論説』への言及をも含め、次のような脚注を組み込んだ。

「法学生の対話」(*London Magazine*, May 1824, p.551)の鋭敏で独創的な著者は、「Aはその価値——実質価値とせよ——を不断に上昇させているのに、Bに対する支配量を不断に減少させるということが十二分にありうる」と述べている。この一節は、『価値の本質、尺度、原因に関する批判的論説』[Bailey [1825] 1967]の著者によって酷評されている。しかしな

---

『アダム・スミスの生涯と著作』の注解 (I) (Stewart [1811] 1976, 340-48/ 訳178-213)を参照にしたと記している (McCulloch [1824] 1995, 114)。だが、ヴィーチが記した受講生名簿にはマカロックの名前はなかったようである。他方、ジェームズ・ミルがステュアートの講義を受講していたはずなのに受講生名簿に記載ないという記録の不備を批判する Bain ([1882] 1967, 14-17) も見よ。D. P. オブライエンが直接にエディンバラ大学に問い合わせたところ、マカロックがステュアートの講義に出席していた痕跡はないとのことだった (O'Brien 1995a, xxxii, n. 30)。さらに、マカロックのエディンバラ大学の欽定講座教授職アプライの交渉をめぐるネイピアとの書簡 (マカロックからネイピア宛, 1825年5月25日, Napier 1879, 53) には、ステュアートが彼のかつての教師であったと示唆する箇所がない。マッキンタイアは何の証拠も示さずに、マカロックはステュアートの学生であったと断じている (Macintyre 2003, 243)。

がら、「対話」の記述ほど、完璧に正しいものはない——AとBは一定量の労働によって生産された。だがいまでは、Aを生産するためにはもっと多くの労働が必要となり、Bを生産するためにはさらに大きな比率の量が必要となった。このような状況下では、Aは明らかに実質価値において、あるいはその生産者の評価において増加したはずである。というのは、それは彼らにもっと大きな労苦と骨折りの犠牲を費やさせたからである。しかしAはBほど急速に実質価値を増加させていないので、それがいまではより少ない量のBと交換されるか、購買することになるのは明らかである。『批判的論説』の著者がどうしてこの区別に気が付かなかったのか、理解に苦しむ。だが、もしこの区別に気が付いていたとしたら、彼が「対話」の著者に対してばかりか、リカードウ氏によって提示された叙述に対しても、彼がなした少数の所見を惜しむことはなかったはずなのは確かである。*Dissertation on the Nature*, &c. p.41. (MacCulloch 1825, 220 fn. 強調は原文)<sup>23)</sup>

さらにマカロックは、ド・クインシーが、スミスは投下労働量と賃金とを（投下労働量による相対価格決定と、賃金・価格連動論とを）区別できていないのに、ベティが最初に区別したと主張したのを踏まえ、賃金の騰落が価値に及ぼす影響に関わる議論の中に、次の注をおいた。

サー・ウィリアム・ベティは、商品の相対価値は、その生産に必要な労働量に完全に依存するという原理を明確に述べた最初の人物〔第2版以降「最初の経済学者」〕であったようである。「もしある人が、1ブッシェルの穀物を生産しうるのと同一の時間で、銀1オンスをペルーの大地の中からロンドンに持ってくることができるとしよう。この場合、一方は他方の自然価格である。もし、新しくてより容易な鉱山のおかげで、ある人がかつて1オンスを獲得したのと同じ容易さで、銀2オンスを獲得することができるなら、そのときには、他の条件にして等しい限り、穀物は1ブッシェルが10シリングでも、かつて5シリングだったのと同じくらいに安価である、ということになるだろう」(*Treatise of Taxes and Contributions*, ed. 1679, p. 31)。24ページでは、「100人の人々に10年間穀物を生産させ、同じ人数の人々に同じ期間に銀を生産させるとしよう。銀の純収入は、穀物の全純収入の価格であり、一方のものと同じ部分は他方のものと同じ部分の価格であると、私は言う」と述べている。また、67ページでは、「100人の農夫で営めるのと同じ仕事を200人で営んでいるところでは、穀物は2倍だけ高価であろう」と述べている。これらの文章は、リカードウ氏が完成させた〔第2版以降「リカードウ氏が完成させるために多大な貢献をなした」〕理論の最初の芽生えを示すものとして、不思議で興味深いものである。(McCulloch 1825, 325 fn.

23) この注は、すべての『原理』の版でそのまま残された。McCulloch 1830, 296 fn.; 1843, 302 fn.; 1849, 318 fn.; 1864, 239 fn. Cf. Rauner 1961, 107 fn. 113.

強調は原文)<sup>24)</sup>

マカロックはここで、ペティについて、リカードウの理論の「最初の芽生え (the first germs)」と表現していることに注意したい。ペティはもはや、自説を補強するための術学的技量の飾りとしての修辭的人物ではなくて、ある理論の端緒、「創始者」として捉えられたのである。そしてそのことはまた、ペティを発見したド・クインシーの文章に明らかであった。

### 4.3 経済学史家としてのマカロック

マカロックは、1825年に『原理』を出版した後、1826年にそれまでの経済学史に関わる知見を再編集し、『経済学の歴史的概略』(McCulloch 1826)<sup>25)</sup>を出版した。この著作はたった24部しか印刷されなかったとされるが(O'Brien 1970, 55 fn.2), それはほぼそのままの形でマカロックが編集した『国富論』(McCulloch 1828)の序論として組み込まれた。これ以降、1863年まで、マカロック版『国富論』にはほぼ同じ序論が最初におかれ続けることになった<sup>26)</sup>。その一節に、こうある。

サー・ウィリアム・ペティが従事した分野は非常に多岐にわたったが、その識別力と独創的な才能により、すべての分野で新しい光を打ち出し、多くの貴重な発見をすることができた。1667年に出版された彼の論文『租税貢納論』、1682年に出版された『貨幣小論』、1687年に初めて出版された『政治的算術に関する論文』、1691年に出版された『アイルランドの政治的解剖』は、17世紀に出版された政治文書の中で最も優れたものであり、多くの独自の見解や、不思議で興味深い情報を含んでいる。彼は、商品の価値はその生産に必要な労働の量によって決まるという基本的な学説を、ざっと付随的にはあるが、明確に打ち出した最初の人物であったようだ。彼はその論考『租税貢納論』の中で、「ある人がペルーの大地から1オンスの銀をロンドンに持ってくるのと同じ時間に、1ブッシェルの穀物を…… [以下省略] (McCulloch 1828, xxix-xxx; cf. McCulloch 1826, 29-30)

1841年にオックスフォード大学のドラモンド教授として経済学を講義し始めたトラヴァーズ・トウイスは、自らの講義の一部を出版しなくてはならないという教授職の義務を果たす際に、

24) 引用文中の『租税貢納論』の当該箇所は、それぞれ Petty [1662] 1899, 50-51/ 訳89-90; 43/ 訳77; 90/ 訳155. また、この注はすべての『原理』の版でほぼそのまま維持された。McCulloch 1830, 359; 1843, 361 fn.; 1849, 377 fn.; 1864, 297 fn.

25) 『歴史的概略』(McCulloch 1826)は、今日ではWeb上からダウンロード可能である。

26) マカロック版『国富論』のIntroductory Discourseとしておかれた序論は、1828年版から1863年版(McCulloch 1863)に至るまで、注には若干の異同があるようだが、本文はほとんど変わっていない。

次のように述べた。

この講義の過程で、目新しい見解が提示されたわけではない。また、多くの著述家たちの労作を利用し、その正確さに満足し、彼らの意見に同意できる場合には、発言の独創性を主張することもできない。私が知る限りでは、マカロック氏の『国富論』序論が、この学問の進歩に関する唯一の英語による歴史的概略である。(Twiss 1847, vi)<sup>27)</sup>

「マカロックが最初の経済思想史家であるといっても、おそらく過言ではないだろう。1820年代以降に出版されたこの分野での彼の仕事には、明らかな先行者がいないのである」(O' Brien 1995a, xiv) というオブライエンの評価は、結論としては正しい。こうした評価の是非を、再びデュガルド・ステュアートとの比較で考えてみるのは興味深いだろう。

ステュアートの『経済学講義』を歴史的方法と見なし、それは近代ヨーロッパの商業社会の発展のさまざまな諸段階において生まれた経済諸理論を検討する形をとったと要約してしまうと、あたかもステュアートもマカロックも経済学の歴史を扱ったのだから、同じようなことをしたという皮相な言明をどうやって免れることができるのか、疑問なしとしない<sup>28)</sup>。私は、ステュアートの『講義』について、現在を相対化するのに、実は学問の歴史を問うのではなく、さまざまな時代の諸物がフラットな建物の中に収められている、いわば博物館のような様を連想する。だから珍しい物を見つけて新たに陳列すれば、他の物はその瞬間に、時代の名札をつけられて幾許か相対化されるわけである。そしてそこには、ローダーデール<sup>29)</sup>のような幾分か

27) トウイスはベティについてこう記述する。「コルベールの1667年の関税改正が発表されたまさにその年に、イギリスで価値に関する著述家が登場する。サー・W・ベティは、価値に関する当時の観念を非難し、価格が規制される原理を明確かつ独創的な方法で説いて先導している。『租税貢納論』で、彼はこう言っている。『ある人がペルーの大地から1オンスの銀をロンドンに持ってくるのと同じ時間に、1ブッシェルの穀物を生産することができれば、一方は他方の自然価格となる。……』」(Twiss 1847, 81)。ベティの評価はもはや定着したのである。またトウイスは、ベティとロックとの違いを非常に正しく理解していた。「ここでは[ロックは]確かに使用価値と交換価値を区別しているように見える。貨幣の使用価値はコンヴェンショナルなものであり、その交換価値は他の商品の価値と同じ考慮事項によって、……換言すれば需要と供給の比率によって決定される。それでもわれわれは、サー・W・ベティの独創的な天才が……『100人でできる仕事を200人の労働者がすれば、穀物は2倍の値段になる』と告げた時に見せたような明快な叙述を[彼の中に]捜してしまうのかもしれない」(ibid., pp. 88-89)。

28) 「マカロック『講義』における経済学の特質の概略は、実はステュアートの教えの文面に極めて近いものであった」(Fontana 1985, 106)。私は、両者はほど遠いと主張する。こうした文言は、一読すれば直感的に「違う」ことがすぐに分かるものについて、未読者を惑わせるものと言わざるをえない。

29) ローダーデールの知的傲慢は、ステュアートの最も著名な受講生の一人H. ブルームをも苦々しく思わせたであろう。「彼は、『偏見によって攻撃される』ことを予期しており、そのような場合には『頑強に自己防衛する』決意を表明しているように思われる。同じような言い回しが全編にわたって続き、著者の発見に関するこうした主張の繰り返し、それらが含意する約束の履行に置き換えられている

のシニシズムが混じる余地がある。

だが、理論が存在すると同時に、そうしたフラットな陳列部屋は配列の意味を失ってしまうだろう。マカロックとステュアートの経済学の歴史を扱う際の最大の違いはそこにある。理論を前提に歴史を語るということは、歴史に対してウィッグ史観をとるべきだという態度と混同されてはならない。そうではなくて、物事に、進行の感覚、新旧の感覚、つまりは方向を与えることを意味するのだ。『経済学文献』の序文に付された以下の告知は、まさにステュアートとは違い、「理論」による歴史を手に入れた（と感じた）人の言葉である。

もしわれわれの目的が達成されれば、この著作はある程度、経済学の歴史であると同時に、主要な経済学の著作の批判的目録となるであろう。本書には、主要な理論のいくつかが台頭してきたことや、経済学上の問題に対する世論を強く決定し、一群の著作物を誕生させたと思われるさまざまな時期の事情についての、短い報告が含まれている。このような記述なしには、著作物を正しく評価することはできない。(McCulloch [1845] 1964, viii-ix. 強調は佐藤)

## 5. おわりに

『リカード全集』(Ricardo 1951-73)には一度もペティは登場しない。このことの責任の一端は、何よりもアダム・スミスの特異な性格にあるのは否定できない。

スミスは虚栄心から、知っていたペティを『国富論』から抹殺した。彼の価値論は支配労働価値説だからペティ → リカードの線上からはかなり外れている。だからスミスが労働価値説の正嫡の継承者と自称する必要も権利もない。しかし彼は、ペティを抹消したことで労働価値説の起源そのものを消去してしまったのである。その思わぬ副産物が、後継者リカードによる、有り得べかりしペティ注解の消失だった。これは労働価値説史にとって最大の痛恨事である。「アダム・スミスの犯罪」とはこのことに他ならない。(馬場 2008, 329)

---

ようである。……真実がいま初めて明らかにされたと言われ、いま私たちに伝えられた光をもつことのなかった重農学派やスミス博士やその他の人々が苦しんでいた不利益についてさまざまな示唆を与えられて、われわれの幸運を祝されるというのは、むしろつらいことである。……ローダーデール卿が『俗論』と呼ぶものを述べ、それに答えるやり方ほど、緩いものはないだろう。彼は、明らかに支持できない、そして最も明白な不明瞭さに巻き込まれなければ決して立とうとは思わなかったであろう立場を守るために、彼自身の想像の産物と戦っているのだ。しかし、もしわれわれが彼に、彼自身うっかりしていたとはいえ、敵対者の主張する教義を十分正確に繰り返し述べてきたことを思い出させれば、おそらく彼は自分の見落としにすぐに納得するだろう」(Brougham 1804, 344-45, 352)。ローダーデール自身の揺れ動く、とらえどころのない経済観については、服部 (1979, 139-43) を見よ。

こうした評に、私はそれほど異論はない。だが、本稿で明らかにしたことを改めて確認すると、こういうことである。リカードウが存命中の19世紀初頭において、ベティの名前が本来の意味で経済学の世界から消えてしまっていたわけではなかった。彼の著名な『政治算術』はもちろんのこと、『租税貢納論』も——例えばリカードウも読んでいた著作の中で——取り上げられていたし、それなりの引用を伴って論じられていたのである。だが、それらについて、誰も気にも留めていなかったし、改めてベティを論じようとする人も出ることはなかった。ただ、リカードウの思考法や、再構築されつつあった経済学に馴致した人々にとってのみ、ベティを「見出す」のは容易であったということである。だから、こうした人々によってベティが「再発見」されたのは、偶然ではなくて、ある意味では必然的な出来事だった。

リカードウが1799年に偶然に『国富論』を手にしたことは、経済学の歴史にとってまことに幸いであった。仮にこうした偶然事がなかったとしたら、スミスの後継をめぐる争いは、イギリスではなくて、フランスを主舞台にしていたかもしれない<sup>30</sup>。その場合には、価値・価格、所得分配、資本蓄積、外国貿易、金融、財政と連なる古典派の理論と政策論<sup>31</sup>は（あるいは現代経済の理論と諸制度の出発点は）、まったく別様の発展を遂げることになっただろう。

そして、その偶然は、ベティを歴史の忘却から救い出すうえで、幸いなことであった。

最後に、マカロックが『経済学原理』(McCulloch 1825)以来、生涯にわたってベティの『租税貢納論』から引用し続けたのは、同じ3箇所、*Treatise of Taxes and Contributions*, ed. 1679, pp. 24, 31, 67だけであって、さらにマカロックに倣ってベティに言及し、引用した人々もまた同じ版本、同じ箇所からの引用に限定されていた (e. g. Roscher [1851] 2009, 75-76/訳160-162; Twiss 1847, 81-82, 89)。マカロックの場合、おそらくは原本を手元において『租税貢納論』を論じたわけではなく、大変稀覯であるがゆえに、どこかで抜粋帳のようなものを作成して、それを利用したのだろう。そのようなマカロックが、「このような重要で信頼性の高い諸論考は、暗闇に埋もれさせてはならない。彼の才能と財産の多くを受け継いだベティの高貴な相続者たちは、彼の諸著作の完全版を出版すること以上に、彼の思い出にふさわしい記念碑を建てることはできないだろう」(McCulloch [1845] 1964, 212) と書き記したのには、彼の正当な感情が十分にこもっている。

いずれにせよ、本稿において、私は、18世紀から19世紀にかけての世紀転換期においてウィリアム・ベティがおかれていた状況を、これまでの研究をやや超えて、詳細に明らかにできた

30) マルサスは、理論体系を構築する力能に欠けており、彼のバランスを欠いた『経済学原理』(初版7章構成、第2版2編7章構成)はそのことを如実に表わしている。J. B. セーのほうがまだ理論的には体系的であったが、リカードウには比すべくもない。

31) これらで私が指示しているのは、単に経済学の理論的な整序とその発展についてのみならず、イングランド銀行法や外国貿易政策などを含む現実の経済的諸制度・政策をも含む経済的領野全体についてのことである。

のではないかと思う。

#### 参考文献

- Bailey, S. ([1825] 1967) *A Critical Dissertation on the Nature, Measure, and Causes of Value*. New York: Augustus M. Kelley. 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』世界古典文庫(日本評論社), 1947年。
- Bain, A. ([1882] 1967) *James Mill: A Biography*. New York: Augustus M. Kelly.
- Bayne, A. (1870) *Autobiographic Recollections of George Pryme, Esq. M. A.* Cambridge: Deighton, Bell, and Co.; London: Bell and Daldy.
- Brougham, H. (1804) 'Lord Lauderdale on the Public Wealth'. *Edinburgh Review* 8 : 343-377.
- Depoortère, C., and Ruellou, T. (2016) 'An Insight into Dugald Stewart's Interest and Influence in Political Economy from a Letter to Thomas Robert Malthus, 1820'. *History of European Ideas* 42 (4) : 534-540.
- De Quincey, T. (1824a) 'The Services of Mr. Ricardo to the Science of Political Economy'. *London Magazine*, March, pp.308-310.
- . (1824b) 'Dialogues of Three Templars on Political Economy', Introductory. *London Magazine*, April, pp. 341-347; I, *ibid.*, April, pp. 347-355; II, *ibid.*, April, pp. 427-428; III, IV, V and VI, *ibid.*, May, pp. 547-566.
- . ([1897] 1970) *Political Economy and Politics*. Being Volume IX of His Collected Writings ed. by David Mason. New York: Augustus M. Kelley.
- . (1985) *Confessions of an English Opium-eater and Other Writings*. Oxford: Oxford University Press. 野島秀勝訳『阿片常用者の告白』岩波文庫, 2007年。
- Fontana, B. (1985) *Rethinking the Politics of Commercial Society: the Edinburgh Review 1802-1832*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodacre, H. (2018) *The Economic Thought of William Petty: Exploring the Colonialist Roots of Economics*. London: Routledge.
- Groenewegen, P. (1982) "Thomas De Quincey: "Faithful Disciple of Ricardo?". *Contributions to Political Economy* 1 : 51-58.
- Harris, J. ([1757-58] 1995) *An Essay on Money and Coins. Parts I. and II.* As repr. in O'Brien (ed.) (1995c). vol. 2, pp. 339-512. 小林昇訳『貨幣・铸貨論』東京大学出版会, 1975年。
- Henderson, W. (1995) *Economics as Literature*. London and New York: Routledge.
- Hull, C. H. (1900) 'Petty's Place in the History of Economic Theory'. *Quarterly Journal of Economics* 14 (3) : 307-340.
- Lauderdale, The Earl of. ([1804] 1966) *An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth and into the Means and Causes of Its Increase*. New York: Augustus M. Kelly.
- . (1819) *An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth and into the Means and Causes of Its Increase*. 2nd edn. Edinburgh: Printed for Archibald Constable & Co; London: Longman, Hurst, Rees Orme, and Brown, and Hursh, Robinson, and Company.
- McCormick, T. (2009) *William Petty: And the Ambitions of Political Arithmetic*. Oxford: Oxford University Press.
- McCulloch, J. R. ([1824] 1995) *A Discourse on the Rise, Progress, Peculiar Objects, and Importance, of Political Economy*. Repr. in vol. 3 of O'Brien (ed.) (1995b).
- . (1825) *The Principles of Political Economy with a Sketch of the Rise, and Progress of the Sci-*

- ence. Edinburgh: Printed for William and Charles Tait; and Longman and Co. London.
- . (1826) *Historical Sketch of the Rise and Progress of the science of Political Economy*. Edinburgh: A. Balfour & Co.  
<https://archive.org/details/HISTORICALSKETCHOFTHERISEANDPROGRESSOFTHE SCIENCEOFPOLITICALECONOMY/mode/2up>
- . (ed.) (1828) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations by Adam Smith; with a Life of the Author, an Introductory Discourse, Notes, and Supplemental Dissertations*. 4 vols. Edinburgh: Printed for Adam Black, and William Tait; and Longman, Rees, Orme, Brown, and Green, London.
- . (1830) *The Principles of Political Economy with a Sketch of the Rise, and Progress of the Science*. 2nd edn. London: Printed for William Tait, Edinburgh; Longman, Rees, Orme, Brown, and Green, London; and W. Curry and Co. Dublin.
- . (1843) *The Principles of Political Economy: with Some Inquiries Respecting Their Application, and a Sketch of the Rise and Progress of the Science*. 3rd edn. Edinburgh: William Tait; Longman, Brown, Green, and Longmans, London.
- . ([1845] 1964) *The Literature of Political Economy: a Classified Catalogue of Select Publications in the Different Departments of that Science, with Historical, Critical, and Biographical Notices*. New York: Augustus M. Kelley.
- . ([1849] 1995) *The Principles of Political Economy: with Some Inquiries Respecting Their Application, and a Sketch of the Rise and Progress of the Science*. 4th edn. Repr. as vol. 2 of O'Brien (ed.) (1995b).
- . (ed.) (1863) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. New edn. Edinburgh: Adam and Charles Black.
- . ([1864] 1965) *The Principles of Political Economy, with Some Inquiries Respecting Their Application*. 5th edn. New York: Augustus M. Kelley.
- Macintyre, G. (2003) *Dugald Stewart: the Pride and Ornament of Scotland*. Brighton: Sussex Academic Press.
- Malthus, T. R. ([1823] 1986) *The Measure of Value*. Repr. as in vol.7 of the *Works of Thomas Robert Malthus*, ed. E. A. Wrigley and D. Souden, London: William Pickering, pp. 175-221. 玉野井芳郎訳『価値尺度論』岩波文庫, 1949年.
- Marx, K. ([1859] 1970) *A Contribution to the Critique of Political Economy*. New York: International Publishers. 武田隆夫・遠藤相吉・大内力・加藤俊彦訳『経済学批判』岩波文庫, 1956年.
- Milgate, M., and Stimson, S. C. (2009) *After Adam Smith: a Century of Transformation in Politics and Political Economy*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Napier, M. (1879) *Selection from the Correspondence of the late Macvey Napier*, ed. his son Macvey Napier. London: Macmillan and Co.
- O'Brien, D. P. (1970) *J. R. McCulloch: A Study in Classic Economics*. New York: Barnes & Noble.
- . (1995a) 'McCulloch and the Literature of Economics'. In O'Brien (ed.) (1995c) vol. 1, pp. vii-xxxviii.
- . (ed.) (1995b) *Collected Works of J. R. McCulloch*. 8 vols. London: Routledge/Thoemmes Press.
- . (ed.) (1995c) *Classical Writings on Economics: as Selected by J. R. McCulloch*. 6 vols. Repr. by J. P. O'Brien, London: Pickering & Chatto.
- Petty, W. ([1662] 1899) *A Treatise of Taxes and Contributions*. Repr. in Petty ([1899] 1986), pp. 1-97. 大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』岩波文庫, 1952年.

- . ([1682] 1899) *Quantulumcunque Concerning Money*. Repr. in Petty ([1899] 1986), pp. 437-48. 松川七郎訳「ペティの『貨幣小論』(1695年)」森戸辰男・大内兵衛編『久留間鯨造教授還暦記念論文集 経済学の諸問題』法政大学出版局, 1957年, pp. 103-143.
- . ([1690] 1899) *Political Arithmetick*. Repr. in Petty ([1899] 1986), pp. 233-313. 大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫, 1955年.
- . ([1691] 1899) *The Political Anatomy of Ireland*. Repr. in Petty ([1899] 1986), pp. 121-223. 松川七郎訳『アイアランドの政治的解剖』岩波文庫, 1951年.
- . ([1899] 1986) *The Economic Writings of Sir William Petty*. Ed. C. H. Hull, 2 vols. Reprinted in One Volume. Fairfield, NJ: Augustus M. Kelley.
- Rauner, R. M. (1961) *Samuel Bailey and the Classical Theory of Value*. London: G. Bell and Sons.
- Ricardo, D. (1951-73) *The Works and Correspondence of David Ricardo*. 11 vols. Ed. P. Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb. Cambridge: Cambridge University Press. 日本語版「リカード全集」刊行委員会訳『リカード全集』全11巻, 雄松堂, 1969-99年.
- Roscher, W. ([1851] 2009) *Zur Geschite der Englischen Volkswirtschaftslehre*. Ann Arbor, Mich.: University of Michigan University Library. 杉本栄一訳『英國経済学史論』同文館, 1929年.
- Smith, A. ([1776] 1976) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. 2 vols. Ed. R. H. Campbell and A. S. Skinner. Oxford: Clarendon Press. 大河内一男監訳『国富論』全3冊, 中公文庫, 1978年.
- Stewart, D. ([1811] 1976) *Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL. D.* In *The Works of Adam Smith, LL. D.*, ed. Dugald Stewart, 5 vols, Vol. 5, pp. 403-552. As repr. in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, vol. 3. Oxford: Clarendon Press, pp. 265-351. 福鎌忠恕訳『アダム・スミスの生涯と著作』御茶の水書房, 1984年.
- . ([1855-56] 1968) *Lectures on Political Economy*, as vols viii and ix of the *Collected Works of Dugald Stewart*, ed. Sir William Hamilton. Reprinted in 2 vols. New York: Augustus M. Kelly.
- Stone, R. (1997) 'William Petty and the Birth of National Account', in his *Some British Empiricists in the Social Sciences 1650-1900*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 5-47.
- Twiss, T. (1847) *View of the Progress of Political Economy in Europe Since the Sixteenth Century*. London: Longman, Brown, Green, and Longmans.
- Veitch, John. (1858) *A Memoir of Dugald Stewart*. In the *Collected Works of Dugald Stewart*, ed. Sir William Hamilton, vol. 10. Edinburgh: Thomas Constable and Co.; Boston: Little, Brown, and Co., pp. vii-clxxvii.
- Winch, D. (1983) 'System of the North: Dugald Stewart and His Pupils'. In Stefan Collini, Donald Winch and John Burrow, *That Noble Science of Politics: A Study in Nineteenth-century Intellectual History*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 23-63. 永井義男・坂本達哉・井上義朗訳『かの高貴なる政治の科学—19世紀知性史研究—』ミネルヴァ書房, 2005年所収, pp. 23-54.
- 大倉正雄 (2013) 「ウィリアム・ペティの経済思想—研究序説—」『経済学論究』67 (2) : 23-51.
- 佐藤有史 (2005) 「トマス・ロバート・マルサス」鈴木信雄編『経済思想4 経済学の古典的世界1』日本経済評論社, pp. 223-280.
- 服部正治 (1979) 「ローダーゲールにおける経済と政治 (完)」『立教経済学研究』32 (4) : 117-144.
- 馬場宏二 (2008) 『経済学古典散策—批判と好奇心—』御茶の水書房.